

## ベルギー王立図書館音楽部門所蔵の音楽理論書について

大 迫 知佳子

(ブリュッセル自由大学哲文学部 音楽・映画・舞台芸術研究所 客員研究員)

### La Bibliothèque Royale de Belgique : Les Livres sur la Théorie Musicale dans la Section de la Musique

Chikako OSAKO

ベルギー王立図書館はその名の下 1837 年に設立されたものであり、前身を 15 世紀までさかのぼることができる。同図書館音楽部門は、ブリュッセル王立音楽院附属図書館と並び、今日のベルギーの音楽資料保存において中心的な役割を果たしている。同部門には、「フランソワ＝ジョゼフ・フェティスコレクション（以下、フェティスコレクション）」を備えるという重要な特色も見られる。このコレクションは、現在のベルギー（モンス）出身の音楽家フランソワ＝ジョゼフ・フェティスの著書、書簡、手稿譜、および、彼が自身の研究のために収集した膨大な蔵書を整理・保存したものである。フェティスが生涯をかけて行った音楽理論に関する歴史的な研究は、同部門が所蔵する音楽理論書の充実のために少なからず影響を与えている。

本稿は、フェティスコレクションを含む同部門蔵の音楽理論書に書き込まれた、第三者の手によると思われるメモの内容を検討し、理論書の記述とそれとの関係を明らかにするものである。

#### 1. ルイジ・ケルビーニ著『対位法とフーガ教程』

ルイジ・ケルビーニ著『対位法とフーガ教程』の初版は、1835 年にパリで出版された。ベルギー王立図書館音楽部門蔵の『対位法とフーガ教程』（第 2 版）内には、手書きコメントの記されたメモが 4 枚挿入されている。うち 2 枚が『対位法とフーガ教程』内の理論に対する考察であった。以下、ケルビーニの理論に関連するメモ挿入箇所の、①ケルビーニによる原文のいかなる点に言及しているのか、②メモにおけるコメント全文、③②の日本語訳を記す。

- 1) 2つの声部のうちどちらかの声部が半音進行する場合を除いて、完全和音への並進行を禁止するという規則に関して、読み手の誤解釈がより少なくなるように表現を改めている。

L'auteur a voulu dire : "... excepté lorsqu'une des deux parties procède par demi-ton et que celui-ci soit le résultat d'une altération du degré diatonique. La chose est évidente, les exemples (\*) présentant une marche par demi-ton. (Cherubini s. d., p. 7 に添付されていたメモ、図 1)

著者は、「2 声部のうち、どちらかの声部が半音で進行する場合を除いて、しかもその半音が全音の [ # や b での ] 変位による半音である場合を除いて」と言いたかった。\* マークの諸譜例の進行は明らかに [ ミーファあるいはシードのような ] 半音進行である。

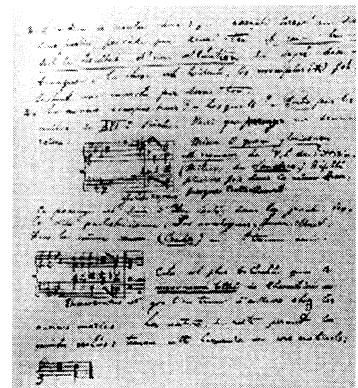


図 1. ベルギー王立図書館音楽部門蔵『対位法とフーガ教程』第 2 版 p. 7 に添付されていたメモ

- 2) ケルビーニが禁じた隠伏5度について、実践作品におけるその使用の正当性を主張している。

Les anciens compositeurs ? – lesquels ?- Certes pas les maîtres du XVI<sup>ème</sup> siècle. Voici qui me donne raison: Missa O quam gloriosum est requiem de T. L. de Vittoria (Milieu du Sanctus.) Répété plusieurs fois dans la même Messe, presque textuellement. Ce passage est loin d'être isolé dans la grande école dite palestrinienne. Les analogues y fourmillent. Dans la même oeuvre (Credo) on trouve ceci : Cela est plus tolérable que le mouvement toléré de Cherubini que l'on trouve d'ailleurs chez les anciens maîtres. La nature, du reste, permet les quintes cachées; témoin cette harmonie de cors naturels ( : Ibid.)

かつての作曲家達？どの作曲家達のことだろう？もちろん16世紀の諸師ではない。以下は、私が正しいことを証明する。ミサ『おお、何と栄光に満ちた』は、T [トマス]・L [ルイス]・デ・ビクトリアのレクイエムである（《サンクトゥス》の中間部）。[この譜例（図1の中間部にある譜例参照）における進行が]、このミサの中で、ほとんどそのまま幾度も繰り返される。このパッセージは、パレストリーナ派と呼ばれた大楽派において稀ではない。同様の例はたくさんある。この作品の《クレド》においては次の「譜例のような」進行が見られる。これは、かつての諸師の作品においてケルビーニが許容する進行よりも許容できる。そのうえ、自然は、隠伏5度を認めている。無弁（自然）ホルンのこの和声はその何よりの証拠だ。

- 3) ケルビーニが *fausse relation* (三全音の対斜) と呼んだ進行が、パレストリーナのミサで使われており、この効果が驚くべきものであることを説明している。

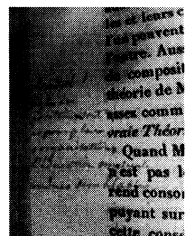
Dans son célèbre Stabat Mater, Palestrina débute précisément par une “fausse” relation de triton : L'effet est prodigieux. On ne peut pas objecter qu'il ne s'agit point ceci de la tonalité moderne. Le passage sonne parfaitement en ré mineur. (Cherubini s. d., p. 9 に添付されていたメモ)

有名な『悲しみの聖母』を、パレストリーナはまさに三全音の「誤った」関係 [つまり、三全音の対斜] で始めている。その効果は驚くべきものである。これが現代の調性ではないという理由をもって[私に] 反論することはできない。そのパッセージは完全に二短調である。

## 2. アレクサンドル＝ジャン・モレル著『ド・モミニ氏の真正音楽理論に関する考察』

アレクサンドル＝ジャン・モレル著『ド・モミニ氏の真正音楽理論に関する考察』は、1822年にパリで出版された。この著は数学者モレルが、ジェローム＝ジョゼフ・ド・モミニの『真正音楽理論』(Momigny s. d.)の独創性を検討するという目的の下、執筆したものである。フェティスコレクション所蔵の同著の余白5箇所には、手書きのメモが見られた。しかし、行末の文字あるいは単語が複数行に渡って途切れており、文章全体を正確に復元することは不可能である。従って以下に、該当箇所のモレルの原文の大意とメモから読み取ることでできた情報を記す。

- 1) モレルは、モミニの音楽理論、つまりソ音弦の分割から導き出された諸音と、肉体および知性との関係に言及した理論に対し、諸先行理論における和声・旋律と肉体および精神との関係、それらの由来から反論を試みようとしている。このモレルの理解を誤りだと主張している (Morel 1822 p. 14)。



- 2) モミニの調 (Ton) の概念について、ひとつの調が含みうる範囲という観点から、ある進行がフランス楽派 (l'école française) において転調 (modulation) とみなされ、その一方でイタリア楽派 (l'école italienne) においては同一調とみなされる旨を記したモレルに対し、アボジャトゥーラという考え方を提示している (Morel 1822 p. 19)。

図2. ベルギー王立図書館音楽部門蔵『ド・モミニ氏の真正音楽理論に関する考察』p. 46のメモ

- 3) モミニの諸規則に対して、音楽と人間の耳との関係の観点から対抗するモレル（つまり、モレルは耳が認めた音楽が自然であるとし、この点でモミニとは異なる立場をとった）を、非常識であるとしている（Morel 1822 p. 46, 図2）。
- 4) モミニの和音、終止、旋律等の分類に対抗するモレル独自の主張に対し、これはモレルの「おはこ」（dada）である旨を書き添えている（Morel 1822 p. 52）。
- 5) モミニの理論書の独創性、正確性、有用性を否定するモレルの結論に同意している（Morel 1822 p. 57）。

以上の検討から、理論書内の術語、19世紀の理論と古い実践作品との関連、音楽・和声の基礎等に関する、理論書の記述とメモにおける記述の関係を明らかにすることができた<sup>1</sup>。同部門における貴重資料への言及はこれまでなされてきたが（Huglo 1978-79, Huys et al. 1972 等）、これらのメモの存在は明らかにされていない。非公式で一方的であるこれらの書き込みは、当該の理論書への読み手の率直な感想とその知識・研究に基づく自負の現れであり、公刊された批評とは別の形で、はからずもそれを我々に伝えているといえよう。

\*本稿は2012年4月に行われた第36回『関西ベルギー研究会』における研究調査報告を、大幅に加筆・修正したものである。

本研究科博士前期課程在学中に、千葉潤之介先生の下で行った研究『矢代秋雄作品における〈完璧さ〉の諸相』において、第2次世界大戦後のパリ音楽院で教えられていた音楽理論と日本現代音楽との関係について考察したことが、その後の研究の全ての始まりとなりました。先生の温かいお人柄と貴重な御助言は、本研究科を離れた後も私の原点であり続けています。在学中の御指導に深くお礼を申し上げるとともに、御退官を心よりお祝い致します。

## 註

1. 1. と 2. のメモの書き手は、1. に特徴的な y の書き方および 1. のメモ用紙の質等から判断して異なっている。さらに 2. の筆跡のうち、d や p 等の特徴が手稿譜におけるフェティスの筆跡と類似する。

## 引用文献

- Cherubini, Luigi et al. (s. d.). *Cours de contrepoint et de fugue* (2e éd.). Paris: Heugel.
- Huys, Bernard et al. (1972). *François-Joseph Fétis et la vie musicale de son temps 1784-1871*. Bruxelles: Bibliothèque Royale Albert I<sup>er</sup>.
- Huglo, Michel. (1978-79). "Les anciens manuscrits du fonds Fétis." *Revue belge de musicologie* xxxii-xxxiii, pp. 35-39.
- Momigny, Jérôme Joseph de. (s. d.). *La seule vraie théorie de la musique utile à ceux qui excellent dans cet art comme à ceux qui en sont aux premiers élémens, ou moyen le plus court pour devenir mélodiste, harmoniste, contrepointiste et compositeur*. Paris: Magasin de Musique de l'Auteur.
- Morel, Alexandre-Jean. (1822). *Observations sur la seule vraie théorie de la musique, de M. de Momigny*. Paris: Chez Bachelier.